

## 文 献 紹 介

小林茂・磯 望・佐伯弘次・高倉洋彰編：  
『福岡平野の古環境と遺跡立地—環境としての遺跡との共存のために—』

九州大学出版会，1998年3月

B5判 289ページ 8,000円（本体）

本書は、「遺跡立地研究会」における学際的共同研究の成果をもとにまとめられたものである。同研究会は1986年9月に発足しておよそ5年の間、考古学・歴史学・地質学・地理学・建築学などの多彩な分野の研究者たちの参加を得て、主に福岡平野とその周辺をフィールドとして学際的な研究活動を続けた。

本書の構成は、次のように12章と資料からなっている。

- 第1章 福岡平野の遺跡立地研究
- 第2章 福岡平野の縄文海進と第四紀層
- 第3章 鳥飼低地の第四紀層と地形形成
- 第4章 博多遺跡群をめぐる環境変化—弥生時代から近代まで、博多はどう変わったか—
- 第5章 福岡地方における弥生時代の土地環境の利用と開発
- 第6章 中世都市博多の成立—博多遺跡群の発掘調査から—
- 第7章 博多遺跡群にみる埋立について
- 第8章 寧波市現存の太宰府博多津宋人刻石について
- 第9章 中世後期博多聖福寺境内の都市空間構成
- 第10章 文献および絵図・地図からみた房州堀
- 第11章 近世の福岡・博多市街絵図—公用図について—
- 第12章 福岡藩の元禄期絵図の作製方法と精度

資料 遺跡立地研究会の活動経過

これらの多くは既に何らかの形で公表された論文等をもとにまとめられたものである。すべての内容について紹介する余裕はないので、筆者の関心に沿って簡単に紹介することにした。

第2章は、詳細なボーリングデータ等の分析によって、福岡平野では縄文海進に3つのピークがあり、その最高海面期は6,000年 B.P.の第1ピー

クではなく、4,700年 B.P.頃の第2ピークであり、最大で+2.2mであったとし、3,100年 B.P.の第3のピークと第1ピークは現在の海水準程度であったとしている。潮位差で補正した最高水準は現平均海面より1.2±1m高かったという結果は、この地域においては縄文海進の最大のピークが遅れ、その海水準が意外と低いことを示しており興味深い。

さらに第3章では、前章での第四紀学的検討の成果に基づいて、具体的に鳥飼低地をとり上げ、遺跡発掘のデータや絵図等も利用し、近代に至るまでの海岸低地の地形変化を詳細に明らかにするとともに、海岸線の前進速度についても言及している。

第4章は博多駅北西側、那珂川と御笠川の河口に至る博多遺跡群の発掘調査結果とボーリングデータを基礎資料として、これに近世の絵図なども加えて、弥生時代以降の海岸線の前進（陸化）を砂丘Ⅰ～Ⅲにおける遺跡の展開と関連付けて明らかにし、陸化速度もあわせて推定している。特にこの砂丘Ⅱ上での古代の官衙的施設を越州窯系青磁の大量出土などから貿易関連施設と捉え、さらに中世の「息浜」（砂丘Ⅲ）の稠密な博多の都市景観の形成へと展開するとの見解は興味深い。また、8世紀末から11世紀末と17世紀後半の海岸線の前進が早かったことも指摘している。10～11世紀前後は海進期であるという一般的知見とは異なるものであり、近くの西新付近の結果とも異なり、きわめて局地的な現象であることから、那珂川・御笠川流域での土砂供給に関わるような変化があったことを示唆している。

このように具体的に都市的な景観の形成を砂丘の発達という地形環境の変化と詳細に関連させて明らかにしたのは貴重な成果であり、学際的な研究会の成果をいわば集大成したともいえる本書の真価が十分に発揮されている。

第6章では、第4章で触れた中世の「息浜」の景観が形成される過程を考古学的に明らかにし、さらに第9章においてはその中世都市の空間構成を、中世末期の「聖福寺古図」と『安山借家牒』を資料として復元している。聖福寺という寺院の境内というきわめて限られた空間に展開したもので、直ちに一般化できるわけではないが、敷地割まで

復元し、間口1間半程度で奥行きが20間を超えるきわめて狭長なものであったと、ミクروسケールで具体的に明らかにした意欲的な試みである。

第11章では、近世福岡・博多の公用図について精度等を検討し、元禄期屋敷割図が実測図として正確で、その後の屋敷割図の基図として重要な役割を果たしたとした。ついで、第12章において、そのような正確な実測図がどのような測量技術のもとで作製されたかについて、元禄期作製の絵図を素材として方位の測量に焦点を当て、作製方法と精度を検討し、相当水準が高かったと評価した。また、それらの絵図は古地磁気資料としても有用であるとした。

なお、付図として博多湾周辺の縄文海進最大ピーク時の推定海岸線が示されており、本書の貴重な成果である。ただ、博多湾やその周辺における海岸線の復元的研究には、山崎光夫や樗木昇一などの先駆的研究があるが、本書ではこれらについて一言も触れられていない。最新の成果を示すことに重点があったためであろうが、どこかで既往の研究成果の整理があれば一層本書の意義が鮮明に

なったのではなからうか。

以上みてきたように、本書はそれぞれに豊かな内容をもった章から構成されている。論文集であるのでやむを得ない事かもしれないが、第2章から第4章の第四紀学的検討の部分については内容的に若干重複するとの印象もあり、構成に工夫をすることも考えられたのではないだろうか。また、図版の一部が既出論文の図をそのまま使用したせいか文字がつぶれて見づらいのは惜まれる。

若干言わずもがなのことにも筆がすべったが、フィールドを共有しながら5年間にわたり続けられた学際的な研究の成果は貴重であり、学際的研究のあるべき一つの方向を示唆している。編者をはじめ研究会参加諸氏の労を多としたい。

なお、本書には、最近増えつつあるが論文集にはまだ少ない索引が付されており、利用上の便宜が大きく有意義である。歴史地理学に関心のある方には、時代に関わりなく是非一読を勧めたい一書である。

(出田和久)